



<p>● <b>学生時代 コピペの常習</b></p> <p>阿部優子 20歳 学部生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東青大学社会科学部の学生・阿部優子は、レポートや小論文を書く時に「コピー&amp;ペースト」をするのが常だった。</li> <li>・ 提出物のテーマに沿ったブログなどをネットで幾つか見つけ出し、適当な部分を切り貼りする。そこに自分の考えや調べたことを盛り込んで完成させていく。</li> <li>・ こうした方法で、勉強は短時間で済ませ、余った時間は友人との食事や、趣味であるファッション、特に古着のレア物探しなどに充てる。</li> <li>・ 優子はコピペは効率的に文章を書くためのツールだと割り切り、罪の意識はない。</li> </ul>
<p>● <b>卒業論文 アイディアの盗用</b></p> <p>優子 22歳 4年生</p> <p>教授 川島雄一</p> <p>友人 浜田理沙</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4年生になり、優子は卒業論文の準備を始める。テーマを「日本における格差社会の広がり」とするが、ゼミの川島教授からは「独自の視点に欠ける、これで書けるのか？」と指摘される。</li> <li>・ 焦った優子は、必死にテーマを探すが、友人の浜田理沙には、とっくにテーマは決めていると強がり言う。</li> <li>・ その理沙から、古着のコートに“穴”があいていると指摘される。「安く買いたいならファストファッションにすれば？」と言われ、憤慨する優子。「安いから古着買ってるんじゃないよ？」</li> <li>・ しかし、このときの経験が優子に卒論テーマを思いつかせた。「格差」を「ファストファッション」の切り口で書いたルポルタージュをネット検索で探し出し、これをベースに卒論を書いていった。</li> <li>・ 論文はルポルタージュの骨子をなぞったものだったが、優子は参考文献にも入れなかった。「借りたのはアイディアだけ。自分の体験も入っているから私のオリジナル」と考えたのだ。</li> <li>・ 卒業論文は川島教授から大いに評価された。そして優子は、就職せず修士課程に進むことになった。</li> </ul>
<p>● <b>修士論文 偽りの“文献参照”</b></p> <p>優子 23歳 修士院生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 川島教授のゼミで研究を続ける優子。修士論文のテーマは、卒業論文を発展させ「格差問題に対する企業の取り組み」とした。様々な企業の社会格差に対する取り組みを国際比較するというものである。</li> <li>・ 川島教授や、研究室のポスドク加藤の勧めもあり、優子は実際に企業へのインタビュー調査を行うことになった。</li> <li>・ ところが論文に記載できるような事例はわずかだった。海外企業への取材などはとてもできそうになかった。</li> <li>・ 困った優子はネットを検索して、ある英文レポートを見付け出す。そこには数多くの参考文献から引用した企業事例が100近くも載っていた。</li> <li>・ そこで、その引用部分だけを日本語訳して掲載することにした。元の文献は一切読んでいなかったが、あたかも大量の文献を参照した力作であるかのように体裁を整えていく。</li> <li>・ 修士論文も、非常に高い評価を得た。</li> </ul>

<p>●ポスドク加藤の「思い」</p> <p>ポスドク 加藤泰子</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポスドクの加藤が川島教授に進言する。研究室では盗用まがいの行為がまかり通っている。「研究倫理」についてゼミ生にもっと教えるべきだと…。しかし教授は特に問題はないと取り合わなかった。</li> <li>・優子は、その加藤から小学生時代の苦い思い出を聞く。夏休みの「自由研究」のテーマを友人に盗まれたという。「ずるいことは人を傷つけ、大事なものを壊す、だから研究不正は許せない」と語る加藤。</li> <li>・心うずく優子だったが…その行動が変わることはなかった。</li> </ul>
<p>●博士論文 データの盗用</p> <p>優子 博士院生 25歳</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・優子は博士課程に進んだ。ポスドク加藤は、教授と考え方が合わず他の大学に移っていた。</li> <li>・博士論文のテーマについて教授に聞かれ、「CSR先進国のアメリカで、格差問題への取り組み」と明快に答える優子。</li> <li>・しかしそのテーマは、ある研究会で聞いた他の研究者の発表から借用したものだった。その時に配布されたデータもグラフ化して掲載した。</li> <li>・「盗用」を行うことに優子はすっかり慣れ、無感覚になっていた…。</li> </ul>
<p>●加藤との再会</p> <p>優子 ポスドク 27歳</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポスドクになった優子は、他の大学で助教に昇進した加藤と再会する。川島教授に呼ばれてセミナーの講師を務めるという。</li> <li>・優子の活躍を称賛する加藤だが、最近発表した優子の論文についてある指摘をする。</li> <li>・優子が論文で引用した文章が、原典に当たらず「孫引き」と問題視された海外論文の引用部分とそっくり同じだったという。孫引きにより生じた“間違い”も含めて…。</li> <li>・無言の優子。しかし動じることなく受け流す…</li> <li>・セミナーで加藤は語る。不正に慣れてしまうと、やがて不正を働いているという自覚すらなくなる…それは研究者として致命的だ、と。</li> </ul>
<p>●不正の露呈</p> <p>優子 准教授 35歳</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学を卒業して15年が経ち、優子は准教授となり、自身の研究室を持つようになっている。</li> <li>・この日、格差問題に詳しい有識者としてテレビ番組のインタビューを受ける。ファッションから格差問題を考えたのが原点、と自分の研究者人生を滔々と語る。</li> <li>・カメラに向かって、何よりも大事なものは、“フェアネス”公平で公正であることだと語る優子。その表情は自信にあふれている。</li> <li>・自分の研究室に戻った優子の元に手紙が届く。盗用の疑いで予備調査が行われるという。優子は無表情で呟く。「盗用なんてするわけないじゃん」</li> </ul> <p style="text-align: right;">END</p>